

I 学校の概要

学力定着モデル校事業 高松市立牟礼南小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全 校
1学級 34名	2学級 36名	2学級 48名	1学級 30名	2学級 42名	1学級 34名	2学級 5名	11学級 229名

○教員数 16名

◆学校の特徴

本校は、開校32年目の学校である。校区内には、香川県立保健医療大学や幼保一元化の施設「はら子どもセンター」も新設され、文教地区としての色合いが濃くなっている。また、昔からの歴史的文化に恵まれた地域でもある。南に山、北に海、東部に広々とした田園を有し、豊かな自然に囲まれた地域でもある。

このような校区の特質を生かし、家庭や地域社会との密接な連携を図りながら、平成21年度は、香川県教育委員会指定「ステップアップスクール推進事業」を受けて、児童の思考力を高める研究とともに家庭学習の在り方を研究推進してきた。平成22年度は「学力向上総合対策モデル事業」を受けて、21年度の研究をもとに、学習習慣の形成と定着を目指して、児童の学習意欲を高めるための指導方法の研究や家庭における学習習慣の定着を研究推進してきた。

本校の児童は、与えられた課題に対しては、自分で解決しようとする。素直で学習にも真面目に取り組む。しかし、自分の考えをうまく表現できない児童が多い。家庭学習では宿題はしてくる児童が多いが、自主的に興味があることを調べたり、次の日の予習やその日に習ったことの復習を進んでしたりする児童は少ない。また、平成22年度学習状況調査の結果から、全教科にわたって、自分の考えを表現する内容や問題の題意を把握して解答することが苦手であることが分かった。

II 研究主題等

研究主題 豊かに表現し、意欲的に学ぶ授業の創造
～言語活動の充実と確かな学力の定着を目指して～

◆研究主題設定の理由

学習指導要領の基本的なねらいは「生きる力」の育成である。各学校では、家庭、地域社会との連携の下、「生きる力」を知の側面からとらえた「確かな学力」育成のための取り組みの充実が求められている。確かな学力を付けるためには、本校児童に不足している思考力・表現力を付けることが必要であると考え、本校では昨年度「豊かに表現し、意欲的に学ぶ授業の創造」をテーマに、「学習習慣の形成と定着を目指して」をサブテーマに設定し、児童の学力の向上に取り組んだ。その結果、個人差はあるが、概ね児童の意欲は向上し、授業中の集中力が増し、家庭学習にも自主的に取り組んでいこうとする児童が増えてきた。また、多様な場面の自己表現にも抵抗が少なくなってきた。

望ましい学習習慣の確立は児童の意欲と学力の向上に寄与したと考えられる。しかし、思考力・表現力の育成は十分とは言えず、言語活動の充実と確かな学力の定着が求められる。

そこで、本年度はサブテーマを「言語活動の充実と確かな学力の定着を目指して」として研究に取り組むことにした。言語活動の充実は児童の学習意欲と学力の向上から確かな学力に寄与するものとする。

そのために、基礎・基本の定着状況の分析、学習状況調査結果の分析をした上で、豊かに表現し、意欲的に学ぶ子どもを育てることを目標においた授業づくり、スキルタイムの充実、少人数授業の効果的な指導方法の工夫、家庭学習や基本的な生活習慣の定着を身につけさせるための支援のあり方の研究等、児童一人一人を見つめた実践と評価を行い、充実した学校生活が送れるようにすることが大切であると考えている。

具体的には言語活動を中心として児童が意欲的に取り組めるような授業展開や家庭学習の仕方を工夫する。そして、3アッププロジェクトとして、児童の実態を把握し、その実態に応じた身に付けなければならない学力を明確にしつつ、「学習指導の方法」「基礎学力の向上」「家庭学習の方策」3つの分野を連携させながら、児童の一人一人に確かな学力を身に付けさせる。

また、評価においては「研究の成果の参考となる10の指標」を取り入れ、その効果を比較・検証して今後の評価に生かせるようにしたい。

◆研究内容及び方法

(1) 研究の概要 (3アップ・プロジェクト)

① 児童の思考力を高める学習指導方法の研究

- 思考力を高める学習の支援の在り方
 - ・ 教科書に軸足をおき、3色ボールペンなどを活用して言語を大切に読解力を育てる。
 - ・ レバリングやモデリング、構成メモ等の活用、言語環境の整備を通して思考力を伸ばす。
- 学習規律を定着させる指導方法を促進
 - ・ 「さぬきっ子学びの三訓」活用
 - ・ 「南っ子のびる五か条」活用
 - ・ 「みんなのルールブック」活用

② 基礎学力の向上

- 15分間ドリルの改善
- 辞書引き学習の取組
- 自主勉強ノート (チャレンジノート) の活用

③ 家庭における学習習慣の定着

- 保護者への啓発・児童への指導の工夫

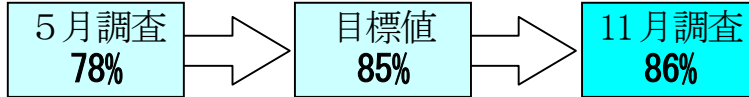


III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (児童質問紙) 私語なく先生や友だちの話をしっかり聞くなど、集中して授業を受けていますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



指標の達成に向けた実践

授業の規律づくりにあたっては、学級のルールを明確にするために「みんなのためのルールブック」の本を活用して実践を行った。簡単なことだが守れないことの多い学びのルールを、全校で共通化して指導を行った。また、見通しを持たせるために授業前に内容を発表させたり、内容をふり返って定着を図るために授業後に感想を発表させたりした。これらの取組により、授業に集中できる児童が増加した。



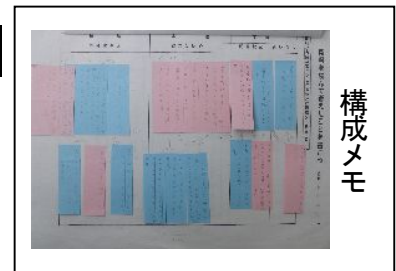
2 (児童質問紙) 授業の内容がどの程度分かりますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



指標の達成に向けた実践

児童自らが学び方を習得できるような学習展開を工夫した。モデリングによって学習内容のさらなる定着を図ったり、レバリングによって文の構成を学んだり、構成メモを活用して選択した資料から情報を取り出して文章を書いたりするなど、様々な手法を活用した実践を行い、思考力を伸ばす取り組みを行った。



3 (児童質問紙) 自分の考えを友だちに分かるように工夫して伝えられていますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



指標の達成に向けた実践

どの教科においても、「書く・話す・聞く」の言語活動を意識して取り組んだ。明治大学教授の齋藤孝が考えた三色ボールペンを活用し、教科書の読み取りを明確にする指導を展開し、言語を大切に読解力を育てた。また、教室に学習の足跡を掲示したり、ICT機器を活用して授業展開を活用するなど、言語環境の整備によって、さらなる言語活動の定着を図った。



4 (児童質問紙) ドリルタイムで自分にあつたプリントを選んで、辞書引き学習に進んで取り組んでいますか。

指標 「①できている+②だいたいできている」の合計



指標の達成に向けた実践

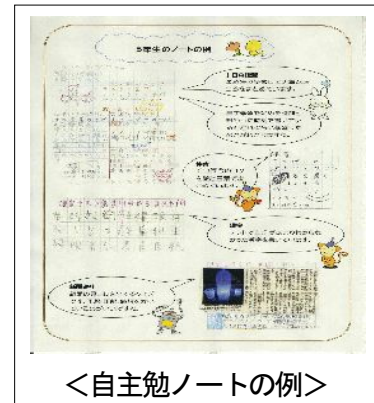
朝のスキルタイムを活用して、漢字・計算の15分間ドリルに取り組み、基礎学力の向上を目指した。また、辞書引き学習を導入し、全児童に1冊学校用の辞書を持たせ、言葉を調べてキーワードを学ばせた。この指標については、1ポイントの上昇が見られたものの、目標値には及ばなかった。実施当初、ドリルや辞書引きの初めての取り組みに児童は大変意欲的で、休み時間にも自ら積極的に取り組む児童もいた。児童の意欲の持続のために、新たなチェックシートの作成や、さらなる目標の設定などの工夫の必要性を感じた。



◆特徴的な取組

1 基礎学力の向上

授業で学習した内容をふり返る、自主勉強ノートを全校児童がつくり、児童が自ら学ぶ態度を育成した。また、学年ごとに、ノート作りのためのポイントを書いた「自主勉強ノートの例」を児童に示した。



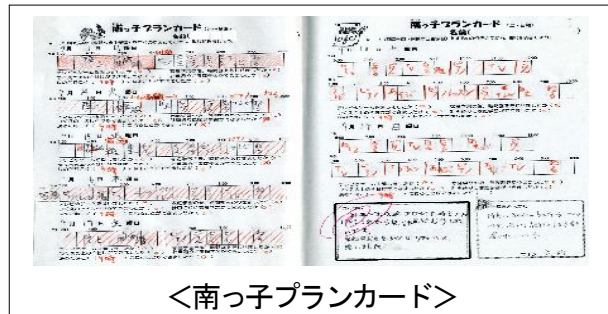
＜自主勉ノートの例＞

2 家庭における学習習慣の定着

学校・家庭が連携して、学習習慣を身につけさせるために、中・高学年では「南っ子プランカード」を活用して、家庭学習の計画を自分で立てるようにした。低学年では「元気な南っ子」を活用して、基本的な生活習慣を身につけるようにした。

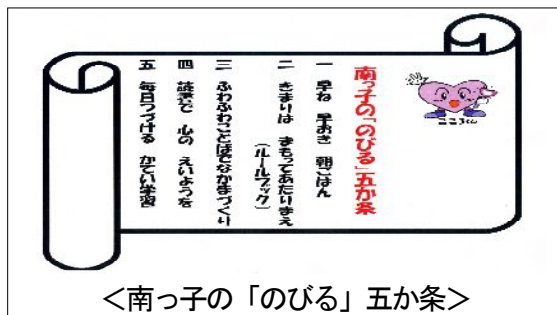


＜元気な南っ子＞



＜南っ子プランカード＞

参観日を利用して、保護者全員に向けて家庭学習についての啓発を行った。家庭学習に関するアンケート結果を公表し、分析結果を伝えた。また、「家庭学習の手引き」や「南っ子のびる五か条」, 自主勉ノートの取り組み等について説明し、学校と家庭が一体となって家庭学習に取り組んでいけるよう、共通理解を深めた。



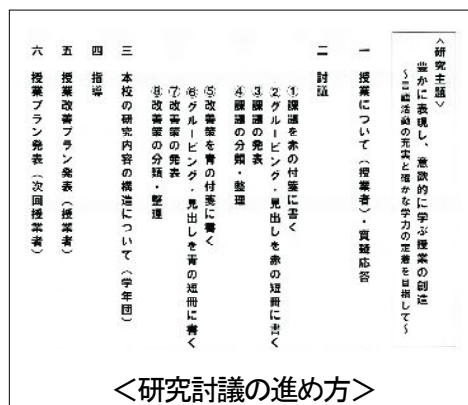
＜南っ子の「のびる」五か条＞



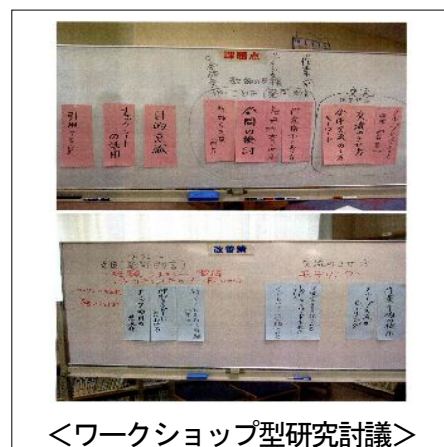
＜家庭学習の手引き＞

3 教師力の向上

教師力向上に向けて、校内現教の研究討議の改善と開発に取り組んだ。授業研究後の討議にワークショップ型の研修を取り入れ、教師全員が意欲的に学び合い、問題解決していく授業方法身につけていく研修会の場となるようにした。



＜研究討議の進め方＞

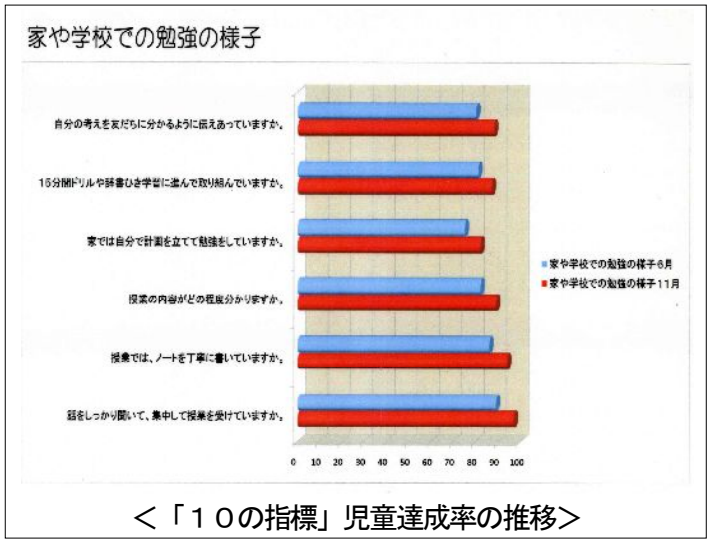


＜ワークショップ型研究討議＞

IV 研究の成果と課題

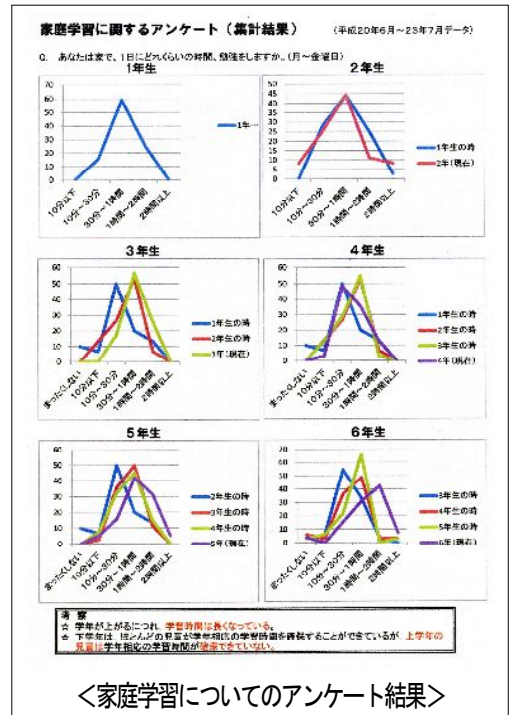
1 成果

- 授業において、レベリングやモデリングや構成メモなどの様々な言語活動の方策を取り入れることで、授業中は意欲的に取り組み、進んで自分の考えを表現しようとする児童が増えてきた。
- 15分間ドリルや辞書引き学習など、言語活動を核とした様々な取り組みの推進により、学習についての児童の意欲が向上した。
- 6月と11月に行った、学校や家庭での勉強や生活についての「10の指標」のアンケート結果をみると、6つすべての項目で達成率を上昇させることができた。達成率の上昇の平均値は約9ポイントであった。(右上グラフ参照) その中でも、「授業の内容がどの程度分かりますか」という項目では、6月の達成率は約66%であったが、11月には約82%と、約16ポイントの上昇が見られた。
- 家庭学習については、児童の家庭学習に関するアンケート結果(右中グラフ参照)から、ここ3年間での推移を見てみると、ほとんどの学年において、学年が進むにつれて学習時間が長くなるという結果が見られた。また、発達段階に応じた学習習慣の定着が見られるようになってきた。



2 課題

- 学校全体としては、学習への取り組みや意欲が向上してきたが、児童の取り組み方や意欲については、個人差がある。そこで、個に応じた学習の指導や方法の開発が必要である。
- さらなる言語活動の充実と、確かな学力の定着に向けて、今後とも授業のねらいを明確化する取組を継続して行っていく必要がある。



3 次年度の研究に向けて

平成24年度の3アッププロジェクトとして、①子どもが主体的に学ぶ授業開発②改善策提案型ワークショップを通じた研究協議方法の開発③校内研究PDCAサイクルを通じた校内研究システムの開発に取り組むことで、児童の学力向上へとつなげていきたい。

そこで、次年度は右図の研究構想図のように取り組んでいきたい。

